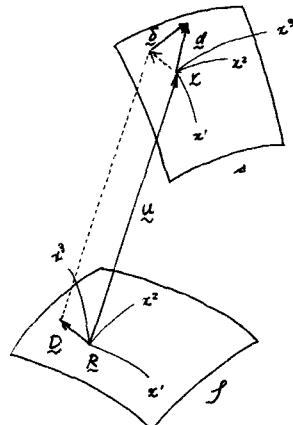


## 積分方程式法によるシェル問題の解析

京大工 正 丹羽義次 小林昭一 ○福井卓雄

二十年前に Casserat surface の概念によるシェル理論が包括的方理論として A.E. Green, P.M. Naghdi 等によってまとめられてきた。<sup>(1)</sup> 最近の研究が示すように、Sandwich shell, 厚肉シェル<sup>(4)</sup>なども Casserat surface として表現することができる。また、近年の概念によるシェル構造ばかりではなく、曲面格子構造、曲面立体トラス、補剛シェルなどの、より一般的な曲面構造に対するもの、Cassarot surface の概念が有効になると思われる。本報では Naghdi によるそれと統形シェル理論に対する、その境界値問題の解の積分表示式を導く。このより積分表示式は、これまで直接と導かれた積分方程式によって数値解析へ応用できるばかりでなく、各種の特異点近傍の解の挙動を把握するためにも重要な手段となるものである。

Cassarot surface 三次元 Euclid 空間の中の曲面  $\Gamma$  を考える。曲面  $\Gamma$  の変形は別の曲面  $\Gamma'$  へ移って可とし、 $\Gamma$  上の点  $R$  は  $\Gamma$  上の点  $R'$  へ移る。通常のシェル理論では、物体は曲面のまわりに三次元的な広がりを持ち、 $z^3$  と考へ、 $\Gamma$  の近くの点  $R'$  は  $\Gamma$  の近くの点  $R$  へ移るとしている。この際に Kirchhoff-Love の仮定をくだけさせた若干拡張した仮定を用いて、 $R'$  の  $z^3$  に移る関係を拘束する。すなわち、三次元体を幾何学的性質を考慮してある拘束のもとに割りの三次元体に移し、結果を二次元的に扱える方法を取る。一方、Cassarot surface における場合は、曲面  $\Gamma$  は三次元多様体として、その中で三次元空間内の別な三次元多様体(曲面)  $\Gamma'$  に移す。(変位  $u = R - R'$ ) さらにその上に、 $\Gamma$  の各点にそれが director と呼ばれる面ベクトル場  $D$  を考へ、変形により、変位  $u$  とはまったく独立に上での面ベクトル場  $D$  に移ることを考える。(変位  $u = R - D$ ) つまり、Cassarot surface は厚みのある三次元体を最初から厚みのない曲面として三次元的に取り扱うかわりに、厚みの結果を表現するかわりに director を導入したものである。その結果、三次元体を幾何学的拘束を考慮しながら取り扱うという解析上の煩雑さを避け得たのが分かる。director の変形の独立性を考慮する上にあり Kirchhoff-Love の仮定よりもはるかに大きな自由度を有する三次元連続体となつている。



統形弹性シェルの基礎式 Naghdi<sup>(1)</sup> によると、Cassarot surface から導かれた、厚さ一定、等方均質の場合の統形弹性シェルの基礎式を示す。以下ではローマ字添字は 1, 2, 3 の値を、ギリシャ字添字は 1, 2 の値を取るものとする。A<sub>ij</sub>, B<sub>ijk</sub> は、曲面  $\Gamma$  上の曲線座標系 ( $x^1, x^2$ ) に対する metric tensor および曲率 tensor である。本文式を簡単にするために、次の微分記号  $\|_i$  を用いる。BPM. 空間ベクトル  $U = U^\alpha A_\alpha + U^3 A_3$ , ( $|A_3|=1$ ),  $A_{\alpha\beta}$  上の双葉変換微分  $|_\alpha$  は  $= \partial/\partial x^\alpha$

$$U^\alpha \|_3 = U^\alpha / 3 - B_{33}^{\alpha\beta} U^\beta, \quad U^3 \|_3 = U^3, \quad B_{33}^{\alpha\beta} U^\alpha = 0.$$

運動方程式  $N^{\alpha i} \frac{\partial u}{\partial x} + p F^i = \rho \ddot{u}^i$ ,  $M^{\alpha i} \frac{\partial u}{\partial x} + p L^i - m^i = \alpha p \ddot{s}^i$ ,  $\text{Exp}(N^{\alpha i} - B_{\beta}^{\gamma} M^{\beta i}) = 0$ .

ひずみ-変位関係式  $e_{\alpha\beta} = \frac{1}{2} (\epsilon_{\alpha\beta} \eta_{\beta} + \eta_{\alpha\beta} \epsilon_{\beta})$ ,  $\epsilon_i = \delta_i + u_3 \eta_i$ ,  $p_{\alpha\beta} = \delta_{\alpha}/\alpha - B_{\beta}^{\gamma} u_{\gamma}$

構成関係式  $N^{\alpha i} = N^{\beta\alpha} = p(2\bar{\psi}/\partial e_{\alpha\beta})$ ,  $M^{\alpha i} = p(2\bar{\psi}/\partial p_{\alpha\beta})$ ,  $D^i = p(2\bar{\psi}/\partial s_i)$

$$\begin{aligned} \text{左} &= 2p\bar{\psi} = [\alpha_1 A^{\alpha\beta} A^{\beta\gamma} + \alpha_2 (A^{\alpha\gamma} A^{\beta\delta} + A^{\alpha\delta} A^{\beta\gamma})] e_{\alpha\beta} e_{\gamma\delta} + \alpha_3 A^{\alpha\gamma} \delta_{\alpha} \delta_{\gamma} + \alpha_4 (\delta_3)^2 \\ &\quad + (\alpha_5 A^{\alpha\beta} A^{\beta\gamma} + \alpha_6 A^{\alpha\gamma} A^{\beta\delta} + \alpha_7 A^{\alpha\delta} A^{\beta\gamma}) p_{\alpha\beta} e_{\gamma\delta} + \alpha_8 A^{\alpha\gamma} p_{\beta\alpha} e_{\gamma\delta} + 2\alpha_9 A^{\alpha\beta} e_{\alpha\beta} \delta_3 \end{aligned}$$

$N^{\alpha i}, D^i$  と運動方程式に表される量の関係は

$$N^{\alpha i} = N^{\alpha i} - B_{\beta}^{\gamma} M^{\beta i}, \quad N^{\alpha i} = D^i, \quad m^i = D^i - B_{\beta}^{\gamma} M^{\beta i}, \quad m^i = D^i + B_{\beta}^{\gamma} M^{\beta i}$$

境界値問題 ただし解の積分表示式 運動方程式を変位  $u_i, \delta_i$  で表すと、運動方程式の形式は自然に満足される。動的の場合には Laplace 変換を取って考えるにすれば、<sup>(5)</sup> 曲面丁工の領域  $D+2D$  上不行の境界値問題は次の如く書ける。ただし、 $A^{ij}$  等は微分作用素である。

$$\text{領域 } D: \begin{vmatrix} A^{ij} B^{ij} \\ C^{ij} D^{ij} \end{vmatrix} \begin{vmatrix} u_i \\ \delta_i \end{vmatrix} = -p \begin{vmatrix} F^i \\ L^i \end{vmatrix} \quad \text{左} =$$

境界  $2D_1$  上  $\bullet$   $u_i, \delta_i$  が与えられる。

境界  $2D_2$  上  $\bullet$   $N^i, M^i$  が与えられる。

$$\begin{vmatrix} N^i \\ M^i \end{vmatrix} = v_u \quad \begin{vmatrix} N^i \\ M^i \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} N^i & M^i \\ M^i & K^i \end{vmatrix} \begin{vmatrix} u_i \\ \delta_i \end{vmatrix}$$

右は境界  $2D_2$  上の単位法線ベクトル。

弾性論の場合と同様に、領域  $D+2D$  は次のように二つある。 $(u_i, \delta_i), (\bar{u}_i, \bar{\delta}_i)$  は  $v_u, v_{\delta}$  の相反関係式成立する。

$$\int_D (N^i \bar{u}_i + M^i \bar{\delta}_i) ds + \int_D p(F^i \bar{u}_i + L^i \bar{\delta}_i) d\Sigma = \int_D (N^i u_i + M^i \delta_i) ds + \int_D p(\bar{F}^i u_i + \bar{L}^i \delta_i) d\Sigma$$

すなはち曲面丁を含む曲面  $J'$  上に  $\bullet$  基本特異解を次の様に定義する。

$$\begin{vmatrix} A^{ij} B^{ij} \\ C^{ij} D^{ij} \end{vmatrix} \begin{vmatrix} \Gamma_{jkl}(x:y) \Delta_{jkl}(x:y) \\ \Xi_{jkl}(x:y) \Psi_{jkl}(x:y) \end{vmatrix} = - \begin{vmatrix} \delta_{ik} \delta_{jl}(x-y) & 0 \\ 0 & \delta_{ik} \delta_{jl}(x-y) \end{vmatrix} \quad x, y \in J', \quad u_i = \delta_i = 0 \quad \text{on } 2D$$

したがって、領域  $D+2D \subset J'$  上不行の境界値問題の解の積分表示式は次の如くである。

$$\begin{aligned} \begin{vmatrix} u(x) \\ \delta(x) \end{vmatrix} &= \int_D \begin{vmatrix} \Gamma_{jkl}(x:y) \Delta_{jkl}(x:y) \\ \Xi_{jkl}(x:y) \Psi_{jkl}(x:y) \end{vmatrix} \begin{vmatrix} p F^i(x) \\ p L^i(x) \end{vmatrix} d\Sigma_x \\ &\quad + \int_D \left[ \begin{vmatrix} \Gamma_{jkl}(x:y) \Delta_{jkl}(x:y) \\ \Xi_{jkl}(x:y) \end{vmatrix} \begin{vmatrix} N^i(x) \\ M^i(x) \end{vmatrix} - \left\{ \begin{vmatrix} N^i & M^i \\ M^i & K^i \end{vmatrix} \begin{vmatrix} \Gamma_{jkl}(x:y) \Delta_{jkl}(x:y) \\ \Xi_{jkl}(x:y) \Psi_{jkl}(x:y) \end{vmatrix} \right\}^T \begin{vmatrix} u(x) \\ \delta(x) \end{vmatrix} \right] d\Sigma_x \end{aligned}$$

積分表示式を用いて、与えられた境界値問題に対する積分方程式は容易に得られる。問題は基本特異解を求めることがあり、一般のシェルを解析的に取り扱うことは非常に困難である事実。  
（6）、（7）、（8）限られた特殊な形状のシェルを除いては一般的な基本特異解は知られていない。  
（6）、（7）、（8）基本解、特異点近傍での挙動などは基本特異解の計算法についての考察は当日発表する。

(1) Naghdi, P.M. "The Theory of Shells and Plates." Handbuch der Physik IIa/1a, 1970.

(5) 小林昭一, 第4回西日本研究討論会, I-7, 1974.

der Physik IIa/1a, 1970.

(6) Sanders, J.L., Jr. J. Appl. Mech. 37, pp. 361-366, 1970.

(2) Malcolm, D.J. & P.G. Glckner, J. Eng. Mech. Div. ASCE 98, p. 1075, 1972.

(7) Sanders, J.L., Jr. & Simmonds, J.G. J. Appl. Mech. 37, pp. 367-373, 1970.

(3) Malcolm, D.J. & P.G. Glckner, J. Eng. Mech. Div. ASCE 98, p. 1183, 1972.

(8) Sanders, J.L., Jr. J. Appl. Mech. 37, pp. 374-383, 1970.

(4) Berndt, F.G. & P.G. Glckner, J. Eng. Mech. Div. ASCE 98, p. 203, 1972.

(9) 既往解に関する文献を多く参考する。